



TITLE:

左方転位される名詞句のテーマ性と談話における連続性

AUTHOR(S):

田口, 紀子

CITATION:

田口, 紀子. 左方転位される名詞句のテーマ性と談話における連続性. 仏文研究 1988, 19: 1-15

ISSUE DATE:

1988-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137743>

RIGHT:

左方転位される名詞句のテーマ性と 談話における連続性

田 口 紀 子

0. はじめに

一般に次のような構文を左方転位 (dislocation à gauche) とよびならわしている。

- 1) La grammaire, c'est pas mon fort.
- 2) La drogue, c'est interdit.
- 3) La vie, vous devez la connaître.
- 4) Les vacances, il faut en profiter.

すなわち主文の一部を文頭に出し、それを代名詞で受けて主文に組み込む構文である。これとよく似た構文に話題化 (topicalization) がある。

- 5) Et Pozzo et Lucky, tu as oublié aussi?
- 6) L'appartement à Neuilly, il a vendu.

話題化は、左方転位と違って、前置された部分を主文の中で代名詞でうけない。本稿では左方転位のみをあつかう。

さて、左方転位文の中で最も多いタイプは、1), 2)のように、名詞句が前置され、それを ce あるいは ça でうけるものである。しかし 3), 4) のように、他の代名詞でうけられることもある。さらに、転位されるのは、1) - 4) のような名詞句に限らず、人称代名詞の強勢形、指示代名詞、動詞の不定詞なども転位される。

- 7) Moi, j'ai tout essayé, rien ne marche.
- 8) Toi, tu ne fais pas confiance aux gens?
- 9) Ça, c'est une surprise.
- 10) Eh bien, celui-là, il devrait te plaire.
- 11) Dormir le jour, c'est excessivement fatigant.

また、主文も単文とは限らず、複文の従属節の中に転位された名詞句をうける代名詞が埋め込まれている場合もある。

- 12) Les idées, c'est avant qu'il faut les avoir.

13) Un escroc, on sait bien que ça n'est qu'une lope.

さらには、左方転位文全体が他の文に埋め込まれている例も観察される。

14) Moi, je trouve que les bébés, les tout-petits, c'est pas très intéressant...

15) Mais dis-lui que les chansons, ça marche.

このように、一見単純に見える左方転位も、転位されるものの種類、その代名詞によるうけられ方で、さまざまな構文にわたる。

左方転位構文は、その名称のために、もともと主文の定位置にあった文要素が、文頭に移動してできた構文であると考えられることが多い。変形文法の立場では、平常の形の文に左方転位という変形がかかって、文中のある要素が文頭に移され、そのために空いた場所に代名詞が残って左方転位文ができると考えられている。しかし談話の観点から見ると、話者が平常な文を一度作ってからその一部を文頭に出す操作をしているとは考えにくい。むしろ、初めに頭に浮かんだ事を口に出してから、それについてのコメントをつけくわえるというのが、発話の自然な順序である。左方転位された部分が一般にテーマと考えられ、後に続く主文がそれについてのコメントとされていることも、そのような発話構造と無関係ではない。

ところで、上で見たような、左方転位される文要素の多様さにかかわらず、そこには強い制限があることが知られている。すなわち、総称的でない不定冠詞のついた名詞句は左方転位出来ないのである。

16) *Une 2 CV d'occasion, je l'ai vue chez le concessionnaire.

(Martin 1983 p. 213)

つまり話者はなんでも思い付いたことを文頭に出せるというわけではない。一般に左方転位の機能は新しいテーマを導入することであると言われている。しかし上のような制限があるということは、この左方転位の機能にも制限があるということになる。

本稿の目的は、特に名詞句が左方転位される場合に対象をしばって、転位され得る名詞句の談話中での性格を明らかにすることによって、左方転位の談話における機能をさらに精密に規定することである。

1. 左方転位に関するこれまでの研究の合意点

左方転位に関しては、これまでに多くの研究が出ているが、諸説の一致を見ているのは次の2点である。

(1) 左方転位の談話における機能は新しいテーマを導入することである。

(2) 左方転位された名詞句は、同定可能な指示対象を持っていないなければならない。

まず、その機能に関してであるが、左方転位は談話中にあるテーマが確立しているときに、それにとって代わるべき新しいテーマを導入するために用いられると言われる。したがって当然、左方転位された名詞句は直前の文のテーマとは同じものであり得ず、そこには必ずテーマの断絶がある。

第二点は、非総称的 (non-générique) で不定 (non-défini) な指示対象を持つ名詞句は、前置されないということである。次の例を見ていただきたい。

- 17) a. Le garçon il-attend devant la porte.
- b. Un garçon ça-attend pas devant la porte, ça-entre tout de suite.
- c. *Un garçon il-attend devant la porte.

(Lambrecht 1981 p. 61)

a. は特定の (spécifique) すなわち定名詞句で、どの少年が問題になっているかが明らかな場面で用いられるので、左方転位されることができる。b. は不定名詞句であるが、「一般に少年と言うものは」という総称的な用法なので、制限に触れない。ところがc. は非総称的な不定名詞句なので、そのコンテキストの中ではどの 'garçon' を指すのか同定できず、左方転位できないのである。

その指示対象が発話の場で同定出来なければならないというこの制限から、一般に左方転位された名詞句の限定詞としては、定冠詞の他、所有形容詞、指示形容詞がよく現れる。

- 18) Les trucs collants, là, ça se met devant ou derrière?
- 19) Et votre ami, là, qui vient de rentrer, c'est qui?
- 20) Ce mouflet, elle s'appelle Marie.

この限定詞の制限は、一見統語的な制限に見えるが、実は左方転位された名詞句の指示対象の談話中での性格（話者や対話者に知られているか、既にその談話に導入済みかどうか、など）に関する制限なのである。

2 - 1. 問題点 / テーマの定義

「左方転位は新しいテーマを導入する」という定義は、その見かけの明快さの裏に、多くの問題を含んでいる。まず、「テーマ」という用語が、いわゆる「文のテーマ」(sentence topic) を指すのか、「談話のテーマ」(discourse topic) を指すのかによって、左方転位の機能の定義がかなり違ったものになってくる。

この「テーマ」(英米系の論文では topic と呼ばれることが多い。thème と topic との間に区別を設ける言語学者もいるが、ここでは同義語として用いる。) の定義については諸説粉粉として、

未だに一般的に認められた定義というものはない。ここでは詳しく立ち入らないが、主なものだけでも「文頭にある要素」、「談話の枠組み」、「既に話者と対話者によって知られているもの」、「それについて語られているもの」などがあり、それぞれの定義がお互いに重なる部分を持っているところから、チームに関する議論が紛糾する原因となってきた。しかし、左方転位に関する議論の時には、先にみたような談話の構造上、「それについて語られているもの」(ce dont on parle)という定義を採用するのが普通である。それどころか、ある名詞句が、そのコンテキストの流れを変えずに左方転位されうるかどうか、'ce dont on parle' という意味での「チーム」を決定する、ほとんど唯一の手がかりとなっていたと言う方が正確であろう。

問題は、それがその文だけのチームなのか、あるいはその談話全体が集束すべき、より広い意味でのチームなのかと言うことである。文のチームはその文の主題であり、必ず文中のある要素に対応する。それに対して談話のチームは、談話中のある表現に一致することもあるが、必ずそうでなければならないということはない。左方転位された名詞句がその文の文チームであるのは疑う余地がないが、それがその文の属している談話のチームでもあるかどうかは必ずしも自明なことではない。

- 21) ...Alors, les tétines, elles sont à trois vitesses. Il faut toujours mettre la plus petite ouverture, la numéro un, hein, ça c'est super-super-important, toujours la plus petite, parce que sans ça ça coule trop vite, c'est mauvais pour la digest...

(TH p. 65)

21) の第一文は、その左方転位からも解るように、文のチームとして 'les tétines' を持っている。そして、それが同時にこの発話全体のチームにもなっているという見方も不可能ではない。一方、この発話全体を、いわば「赤ん坊へのミルクのやり方」といった、もっと抽象的な主題に関するものとも考えることができる。このチームは、具体的には発話中のどの表現にも対応していない。

実際これまでの研究によっても、左方転位されるのが文チームなのか談話のチームなのかという問題は、はっきりした決着を見ていない。Galambos (1980) は、*Zazie dans le métro* 中の左方転位文158例を分析して、「左方転位文が導入するトピックは照応表現、またはその他の方法によって、いくつかの発話をとおして (throughout a number of utterances) 維持される (Galambos 1980 p. 126-127)」としている。

Barnes (1985) は、もう少し細かい分析をして次のように述べている：

集めた用例のうち99%までは、左方転位された名詞句がその文の文チームとなっている。従って左方転位されるのが文のチームであるのは確実である。問題は転位された文のチームが談話のチームにはなっていない場合で、これには次のようなケースがある。

1. 左方転位された文チームが現行の談話のチームと同じステータスを持っているが、それが現行の談話のチームに取って代わる事なく、なんらかの理由で放棄されてし

まう。

2. 転位された文のテーマが、現行の（談話の）テーマに対して機能的あるいはテーマ的に従属している場合。具体的には

- a. 挿入的陳述 (parenthetical statement)
- b. 説明的陳述 (explanatory statement)
- c. 実例, あるいは個々の具体的ケース (illustration or particular case)

(Barnes 1985 p. 31-34 要約筆者)

その存在は認めながらも、Barnes は数の上から、このようなケースは規則と言うよりは例外であると判断しているようである (*op. cit.* p. 34-35)。Ochs-Keenan & Schieffelin (1976) も、このような左方転位の挿入的用法に注目して次のように述べている：

このようなケースでは、話者はあることに思いいたり、そのことについてちょっと言っておいた方がいいと考えるのである。[……]左方転位とは無計画な話し方 (unplanned speech) の一つの形式である。(Ochs-Keenan & Schieffelin 1976 p. 248)

この「無計画性」ということと、「談話のテーマ」とは、そもそも相いれない。談話のテーマとはその談話のゴールであり、予めそこに到達するように談話全体が組織されるべきものだからである。しかし理論的には「談話」の長さの取り方によって、この談話のテーマとは「長い講演の演題」といったものから、最も短い場合には「連続した二つの文テーマ」までの幅を持つ。この点について Galambos は、「いくつかの発話をとおして (Galambos 1980 p. 127)」と、曖昧な言い方をしているが、厳密に言えば文のテーマと談話のテーマをわかつ点は、左方転位されたテーマがその次の（左方転位を含んだ文の次の）文のテーマにもなっているか否かにつきるのである。

つまり、上で見た Barnes の言う「例外的用法」も、もし転位された文のテーマがもう少し長くテーマとして維持されれば談話のテーマとして認められるわけで、Barnes の「例外的用法」と「規則的用法（左方転位が談話のテーマを導入する用法）」の違いは、テーマ性の質的な違いと言うよりは、量的なものであることは明らかである。

「挿入的」「説明的」あるいは「実例」としてある談話に挿入されたテーマが、そのまま次の談話のテーマとなるのは、ごく一般的なテーマの代わり方である。Barnes があげているこれらのケースが談話のテーマにならず文のテーマであるのは、たまたまその後の文で同じテーマが取り上げられなかったためなのであって、その「挿入的」「説明的」「実例」としての性質のためではないのである。

以上の考察で、左方転位文が導入するテーマを談話のテーマと考えるのは無理があるばかりではなく、理論的に必然性がないことがわかる。談話のテーマが必ずしも発話の一表現と対応するとは限らないことも考え合わせると、むしろ左方転位文の機能は新しい文のテーマを導入することであると規定し、それが談話のテーマに取り上げられるかどうかは場合によると考えた方が事

実に即していると思われる。

2-2. 左方転位は文のテーマを導入する

Barnes (*op. cit.* p. 35) が「例外的」と形容する、左方転位による一文だけの文のテーマの導入は、日常会話では決して例外的なものではない。また Ochs-Keenan & Schieffelin (*op. cit.* p. 248) は、これらのケースを称して「無計画な話し方」といつているが、まさに無計画である会話に左方転位は多く見られるのである。

会話とは基本的には二人の話者の対話という形式で進行するものである。従って両者が合意した一つの談話のテーマについて、あるまとまった分量の対話が行われると言うよりは、それぞれの話者が新しいテーマを出しながら、確固とした到達点の展望なしに会話が行われて行くのが普通である。しかもそれぞれの話者は、相手の出したテーマとは別のものを、相手の話の腰を折る形で提起することもある。

22) L : Mais tu attends que les gens viennent chez toi, ou quoi?

D : Non, non, non, je te dis. C'est très flou, je ne sais pas.

L : Le type, il ne vient pas tout seul! Il faut faire quelque chose.

(RV p. 65)

23) L : Mais tu es déçue de temps en temps?

D : Je ne sais pas. Oui. Oui et non. Bon, s'il ne s'est jamais rien passé de spécial, je n'ai jamais... J'écoute beaucoup les gens, je les regarde exister, mais...

L : Mais la confiance, on ne peut pas la faire tout de suite.

(RV p. 65)

24) — Pardon. Je t'ai loué ici sans enfants et maintenant t'en as un sans mon autorisation.

— Ton autorisation, tu sais où je me la mets?

(Z p. 28)

しかし、相手の話の腰を折ると言っても、まるで違った話題を持ち出しているわけではないことがわかる。相手の話を聞きながら「でも男と言うものは」「でも信頼というのは」と、話を進める形で話題を変えている。後にまた詳しくみるが、新しいテーマをたてると言っても、その指示対象が同定出来るものという制限に触れなければ何でもいいというわけではなく、それまでの談話の流れの中である程度動機があるものでなければならない。

さらに24) では、いわゆる「相手の言葉じりを捕える」式の左方転位になっていることに注目

されたい。相手の発話中の表現をすぐに自分の発話のテーマにたてることは、これから自分が言おうとすることが相手の発話と密接に関連している事を強調し、自分の発言のその議論の流れの中での正当性を主張することにもなる。テーマのレベルでは直前の相手の発話と断絶していながら、言語表現のレベルでは鎖のようにつながっているために、その発話の談話での関与性を強く訴えることが出来るのである。

このように、左方転位によって導入される新しい文のテーマは、話者同士の合意の上で談話のテーマとして導入されているわけではないことがわかったが、その新しい文のテーマが結果として次の談話のテーマになる事が保証されているわけでもない。第一に、会話というものの性格上、相手の出した新しい文のテーマを受け継ぐ義務はない。話者は自ら別のテーマをたてることもできるし、以前のテーマに再び話を戻すこともできる。さらには話者自身が自分で出した文のテーマをすぐに放棄することもある。それどころか、時には、同一の話者が一つの発話の中で次々と左方転位で新しいテーマを出すことがある。

- 25) J : Moi, j'ai tout essayé, rien ne marche : ma mère, elle est aux Caraïbes, Sylvie aux Etats-Unis, Pierre y vent pas d'une nurse dans la maison, y'a pas de place dans les crèches, Madame Rodriguez elle veut plus entendre parler de nous depuis l'affaire avec les flics, même le ménage elle veut plus venir le faire [...]

(TH p. 70)

- 26) S : Je te dis, je m'en sors pas. Mes parents, je suis fâchée avec eux, d'abord, ils sont en Bretagne, et puis ils s'en foutent, de moi. Et la môme, faudrait l'emmener au square...

(TH p. 83)

これらはいずれもかなり感情的な場面での発話である。次々に新しいことを持ち出しそれについて述べて行くのは、発話に論理的な構成がない事を示している。これらの例は、左方転位されるテーマを談話のテーマと考えたのでは説明できない。このように、直前の文のテーマ（あるいは談話のテーマ）よりさらに前面に別のものを打ち出し、それについて語るために用いられるのが左方転位なのである。直前の文あるいは談話のテーマとのコントラストこそが左方転位の機能の本質であり、それによって新しく導入されたテーマがその後の談話で維持されるかどうかは不確定であるし、何よりも付随的な事なのである。

3 - 1. 問題点 / テーマの新しさ

左方転位の機能を「新しいテーマを導入する」から「新しい文のテーマを導入する」と言い換

えた今、問題になるのは「新しい」という言葉の意味である。

まず、一番ゆるい解釈は、この「新しさ」を直前のテーマに対する「新しさ」と捉える解釈である。つまり、「新しい文のテーマ」とは直前の文のテーマとは異なった文テーマの事になる。左方転位によってある文のテーマが導入される必要があった以上は、それが直前の文のテーマとは異なっているのは当然であり、この解釈での「新しい」という用語は、上で確認した左方転位の機能になんら新しい制限を付け加えない。

次に可能な読み方は、その転位された名詞句がその談話で初めて文のテーマに取り上げられるという読み方である。言い換えれば「文のテーマ」としてその談話で「新しい」ということになる。この場合、その名詞句がそれまでに既に談話に登場しているケースと、談話自体にもそこで初めて導入されるケースの両方を含んでいる。

最も制限のきつい解釈は、その名詞がその談話で初めて文のテーマになるだけではなく、指示対象としても初めて談話に導入されるというものである。

3-2. 「新しさ」とは直前の文テーマに対する新しさである

まず、最もきつい解釈と実際の左方転位の用法とを比べてみると、これは一致しないことが明らかである。

27) J : Oui, ben oui, je sais, parce qu'après le biberon de cinq heures, ça recommence à huit heures...

S : Sans compter que les baby-sitters jusqu'à trois heures du mat, bonjour le tiroir-caisse...

J : Et puis les baby-sitters, c'est pas la joie : ils couchent pas les mêmes, ils les laissent trainer à moitié à poil...

(TH p. 82-83)

28) S : [...] Et si on vous paye, Graton, c'est pas pour avoir des idées un peu trop tard, c'est pour avoir des idées avant qu'il ne soit trop tard. Vous comprenez ça, Graton, les idées c'est avant qu'il faut les avoir! [...]

(TH p. 34)

左方転位は指示対象としてその談話にとって新しいものを導入するどころか、このように談話の前の部分で（他のテーマに関して）出たものを新たに切り立てて、それについてさらに話を進めて行くときにもよく用いられるのである。

実際、Barnes の資料では、左方転位の用例の66%が 'evoked' すなわちその談話のまえの部分

で一度言及されたものか、またはその発話の場に存在しているものを転位した例であるという (Barnes 1985 p. 63)。従って、左方転位の機能を「新しい指示対象を初めてその談話に文のテーマとして導入する」と定義することは、事実反している。

それでは、二番目の解釈、「文のテーマとしてその談話で初めて採用された」はどうだろうか？ Barnes の資料の34%が談話において全く新しい指示対象を転位したものであるが、もとよりこのケースは文のテーマとしても初めて採用されるわけであるから、上の条件をみだす。残り66%のうち大部分は、それまで談話の中でテーマだったことがない指示対象で、現在の談話のテーマであったり、あるいはかつての談話のテーマであったりするものは、数としてはあまり多くないという (op. cit. p. 65)。

確かに、以前談話のテーマだったものが左方転位されることは多くない。まして一度左方転位された名詞句が近いコンテキストで再び左方転位されることは非常に希である。それでも次のような例があった。

29) F : Mais, Delphine, tu aimes bien le vert? La salade, par exemple, quand tu la sors du jardin, elle est vivante, mais après? Elle se flétrit, donc elle est morte.

D : Oui, mais moi, je ne vois pas ça pareil. Pour moi, la salade, c'est vachement loin, c'est beaucoup plus loin de moi que la viande, qu'un animal. La salade, c'est plus une amie, c'est plus léger...

(RV p. 24)

以上から、「新しい文のテーマを導入する」と言う時の「新しさ」とは、指示対象としての談話の中での新しさでもなく、また文のテーマになるのが初めてであるという意味での新しさでもなく、結局最も緩い意味であるところの、「直前の文のテーマとは異なった」という意味でしかないことが明らかになった。

4-1. テキストの一貫性 / 指示対象の同定可能性に関する制限

左方転位の機能は、直前の文のテーマとは違ったテーマを新しく次の文のテーマにすえることである。談話に既に出たものが転位されることが多いが、談話にとって全く新しい指示対象がいきなり転位されることも、ないわけではない。上で引いた Barnes の資料の 1/3 がこのケースである。しかし、どんな新しい指示対象でも文のテーマにすえられるかというと、そういうわけではない。そこには同定可能な指示対象でなければ転位されないという強い制限があるのである。この制限は、談話の流れにとってはどういう意味を持つのだろうか？

まず、ある名詞句が左方転位されるためには、その名詞句が談話の中で取り上げられる動機が

備わっていなければならないことが、しばしば指摘されている。Barnes の資料の66%が“evoked”なもの（その談話で一度話に登って、その後発話の場に潜在的に存在していると感じられるものか、あるいは実際にその場に存在しているもの）が、左方転位された例であることも、この指摘と一致している。

さらに、残りの34%の、談話にとって新しい指示対象の左方転位例も、その談話に全く無関係なものではなく、話の流れの中で、ある種の必然性を持っているという。(Barnes 1985 p. 68-) この必然性とは、Reinhart (1980, 1982) が ‘implicit control’ と言い、また Halliday & Hassan (1976) が、 ‘collocation’ と言っているものに、おおよそ相当するだろう。例えば、「指一手」「教室-学校」のように、部分と全体の関係や、帰属関係、さらには「新聞-売店」「日曜日-買物」「潮干狩-バケツ」等のように、自然な連想でつながれる指示対象同士の関係である。この collocation (以下「連語」と呼ぶ) は、単語の意味的なレベルだけではなく、話者の個人的経験や、発話の状況など、プラグマティックなレベルで決定されるものもあり、全ての連語のタイプを談話に先立って規定しておくことはむずかしい。

Reinhart (1982) は、相前後する二つの文が無理なくつながるためには、前の文の一要素と後ろの文のある要素（主語である場合が多い）の間に、（１）同一指示（代名詞による照応など）、（２）部分的同一指示（所有形容詞による照応）、（３）連語関係、のいずれかが成り立つか、もしくは（４）接続詞による二つの文の関係づけがなければならないとしている。（４）の接続詞による関係づけとは、名詞句自体に前のコンテキストとのつながりがなくても、接続詞によってそれが保証されるというものである。

30) The first man landed on the moon. At the very same moment, a young boy dies in Alabama of untreated pneumonia.

(Reinhart 1980 p. 176)

このようにして、同定不可能な新しい指示対象 ‘a young boy’ も、主語名詞句として談話に導入されることが出来る。

Barnes は左方転位される名詞句にも同様の制約があると指摘している (Barnes 1985 p. 68-75)。しばしば指摘されてきた、左方転位される名詞句の談話での必然性は、名詞句が上の（１）-（３）のいずれかの条件を満たさなければならないこと、と言い換えることが出来るだろう。

すると、同定可能性に関する制限（ある名詞句が左方転位されるためには、その名詞句の指示対象が同定可能でなければならない）は、その談話のコンテキストの中で、全く初めて導入される同定不可能な指定対象は、前の部分と（１）-（３）のいずれの関係でもつながらない事がその原因であると考えられる。つまり、新しい指示対象なのだから、自動的に（１）の前の文の要素と同一指示では有り得ない。また、同定出来ないのだから、（２）の所有形容詞による限定は不可

能である。さらに（３）の連語関係による結び付きは、おそらく定名詞句と、総称的名詞句にしか成立しないのではないかと考えられる。次の例を見ていただきたい。

31) R : [...] La seule chose qui m'intéresse ici, c'est l'enfant, et je crois comprendre qu'elle a bien besoin qu'on s'occupe d'elle.

P : Ah oui? Et pourquoi?

R : Il n'y a qu'à vous voir et vous entendre pour comprendre ce que je veux dire, Monsieur. D'ailleurs, vous n'êtes pas le père.

(Pierre が Mme Rapons の名前を言い間違え、それについてのやり取りがあつて)

P : Madame Rapons, oui, c'est ce que je disais. Un enfant, on sait toujours qui est sa mère, mais son père, c'est déjà beaucoup plus hasardeux...

(TH p. 69)

ここでの「子供というものは」というテーマは、直接には「あなたは父親ではないじゃないですか」の「父親」と連語関係で結ばれている。しかしこの「子供」が非総称的読みの「ある子供が……」であつたら、この連語関係は成立しないのである。

このように、左方転位される名詞句が（１）－（３）のいずれかに該当しなければならないという制限があるのは、30) のような名詞主語の場合と違って、（４）の条件のみで前のコンテキストとのつながりが保証されることが出来ないことに原因があると考えられる。これは次の例でも確認される。

32) a. A ce moment-là, un homme est entré dans la salle.

b. *A ce moment-là, un homme, il est entré dans la salle.

まとめると、左方転位できるのは指示対象が特定できるもので前のコンテキストと上の（１）－（３）のいずれかの結び付きを持っているもの、もしくは不特定の総称的名詞句で、上の（３）の連語による結び付きを持っているものに限られるのである。

4 - 2. 動機のない名詞句の左方転位

しかし、同一指示によっても、連語関係によっても、前のコンテキストと結び付かない名詞句が左方転位されることもある。

33) (捜し物をしながら)

M : Les petits draps, où ils sont?

(TH p. 83)

34) (アメリカでの肥満の問題に関して)

E : [...] Parce que moi, la première fois qu’j’suis arrivée, j’ai vu des, surtout les femmes, ça des fois c’est des monstres hein

M : Mais ma mère elle en revenait pas, hein!

(Barnes 1985 p. 89)

Barnes は、34) の様に転位された名詞句自体にコンテキストとのつながりがないケースは、接続詞や、文中の他の照応詞によってつながりが保証されるとしている (*op. cit.* p. 73-75)。しかし、34) の左方転位文が照応詞 *en* によって前の文とのつながりを保障されているとしても、'Mais' に、30) の 'At the very same moment' のような、前のコンテキストとの意味関係の明示を見ようとするのは無理があるし、33) にはそのような前の部分とのつながりを示すものはいっさいない。

しかし、一見唐突なこれらの左方転位の用法も、これらの名詞句が名詞主語になった場合と比べると、前のコンテキストとのつながりが良いと Barnes は言う。例えば 34) の最後の文を 'Mais *ma mère en revenait pas hein*' とすると生じてしまう断絶感を、左方転位を用いることによって和らげることが出来るというのである (Barnes *op. cit.* p. 88)。

もともと左方転位はその談話に潜在的・顕在的に存在しているものを談話の前面に取り立てて、それについて何か言うための手段である。指示対象としてその談話に新しいものが転位されるケースも、連語関係によって前とのつながりが保証される、定名詞句か、総称名詞句である。いうなればこの場合も、談話の現行のテーマとの連語関係により、潜在的に、テーマとなる可能性を持つものの中から、ある一つのテーマを選んでいるのである。

それに対して、一見その談話中でなんの必然性もない名詞句が転位されると、それがかえって、あたかも談話の背後に存在していた潜在的なテーマの候補であった様な印象を与えることが出来るのである。左方転位された名詞句と、主語名詞句とを比べた場合、左方転位されたものの方が、名詞主語となっているものよりも前のコンテキストとの連続性が低い、と Givón が指摘しているのは (Givón 1983 p. 360) この事情を裏づけている。直前の文のテーマとの断絶があるために、実際には意味的にそれまでの談話とつながりの悪いテーマをかなり強引に持ってきて、それが同定可能な指示対象を持つか、不特定のであっても総称的用法ならば、前の談話と (3) の連語関係を持つことができ、発話の場に潜在的に前提されているという印象を与えるので、談話は不自然にならないのである。

5. 結論

本稿で明らかになった左方転位の機能をまとめると次の通りである。

1. 左方転位は直前の文のテーマとは異なった文テーマを導入する。
2. 文のテーマとして導入される名詞句は、その談話で既に話題に登ったもの（テーマになっていなくても構わない）か、その発話の場に実際に存在しているものと、同じ指示対象を持っているか（表現が違っていても構わない）、あるいは連語関係によって前のコンテキストと関係づけられる名詞句である。
3. 左方転位はそれまでの談話の流れと無関係な、新しい指示対象を導入することもできる。これは、1. 2. で述べた、左方転位の基本的な条件、すなわち、直前の文とテーマが断絶していながら、しかも転位された名詞句が談話の場に前提されていること、を利用した派生的用法である。

最後に、左方転位は名詞主語を避けるための手段である、という考え方 (Lambrecht 1984) について述べておきたい。日常フランス語で好まれる文タイプは「代名詞＋動詞」という型であって、左方転位は、本来なら名詞主語文となるものを、名詞句の転位によって「代名詞＋動詞」という文型にするための手段であるという主張である。

確かに会話フランス語では名詞主語は非常に少ない。代わりに、

'Il est arrivé un accident.'

'Il y a le téléphone qui sonne.'

'J'ai ma mère qui est malade.'

等、主語の位置から名詞句をはずすためと思われる、非人称文、提示文が、多くみられる。

しかし、会話にも名詞主語文が全くないわけではない。

35) R : [...] Je suis diplômée, j'applique les méthodes prônées par les plus grands pédiatres. La médecine est une chose sérieuse.

(TH p. 69)

36) M : Et le jour où ils ont saccagé l'appartement, Pierre qui rentre, le couffin avait disparu, il l'a retrouvé dans les chiottes, [...]

(TH p. 64)

さらに、左方転位しなくとも代名詞主語となる文が、左方転位された形でより頻繁に用いられるケースも多い。

37) a. Les opinions des autres, je m'en moque.

b. ? Je me moque des opinions des autres.

38) a. Moi, j'ai une idée.

b. ? J'ai une idée.

したがって、左方転位の機能が名詞主語を避けることだけにあるとは考えにくい。37) b., 38) b. のように、代名詞主語の文が、左方転位された形よりも会話ではかえって不自然なのは、や

はり、直前の文のテーマに対して別の文のテーマをたてるという左方転位の機能から説明されるべきだろう。

むしろ重要なのは、ある名詞句を談話に導入する場合、どういう時にそれを名詞主語とし、どういう時にそれを左方転位して代名詞で受ける形にするのかということである。非総称的不定名詞句に関しては、先に見た Reinhart のテキストの連続性のための条件のうち、(4) の接続詞による関係づけに関する違いが、同定不可能な名詞句が主語名詞句の形では出せても、左方転位の形では出せないという事実を一面から説明していると思われる。この点に関しては、さらに前景／後景の対立と、名詞句のテーマ性が関わってくると考えられる。この問題は定名詞句の転位の問題とあわせて次稿に譲りたい。

CORPUS

RV: *Le Rayon vert*, L'Avant Scène Cinéma No 355, 1986

TH: *Trois Hommes et un Couffin*, L'Avant Scène Cinéma N° 356, 1987

Z: Queneau, *Zazie dans le Métro*, Gallimard, folio

REFERENCES

- Barnes 1985 : Barnes (B.K.), *The Pragmatics of Left Detachment in Spoken Standard French*, John Benjamins, 1985, viii+126 p.
- Galambos 1980 : Galambos (S.J.), 'A clarification of the notion of topic : Evidence from popular spoken French', in *Parasession on Pronouns and Anaphora*, Chicago Linguistic Society, 1980, p. 125-138
- Givón 1983 : Givón (T.), 'Topic continuity in spoken English', in *Topic Continuity in Discourse : Quantified Discourse Studies*, Givón (éd), TSL vol. 3, John Benjamins, 1983, p. 343-363
- Halliday & Hassan 1976 : Halliday (M.A.K.), Hassan (R.), *Cohesion in English*, Longman, 1976, 383 p.
- Lambrecht 1981 : Lambrecht (K.), *Topic, Antitopic, and Verb Agreement in Non-Standard French*, John Benjamins, 1981, vi+113 p.
- Lambrecht 1984 : Lambrecht (K.), 'A pragmatic constraint on lexical subjects in spoken French', in *Papers from the 20th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, 1984, p. 239-255
- Larsson 1979 : Larsson (E.), *La Dislocation en Français : Etudes de Syntaxe Générative*, CWK Gleerup, 1979, 161 p.
- Martin 1983 : Martin (R.), *Pour une logique du sens*, P.U.F., 1983, 268 p.
- Ochs-Keenan & Schieffelin 1976 : Ochs-Keenan (E.O.), Schieffelin (B.B.), 'Foregrounding referents : A reconsideration of left dislocation in discourse' in *Proceedings of the 2nd Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 1976, p. 241-257
- Reinhart 1980 : Reinhart (T.), 'Conditions for text coherence', in *Poetics Today*, vol. 1 : 4, 1980, p. 161-180

Reinhart 1982 : Reinhart (T.), *Pragmatics and Linguistics : An Analysis of Sentence Topics*, Indiana Univ. Linguistics Club, 1982, 38 p.